

漆とともに66年。

「まだまだや。技を伝えるのが、
これからの仕事や」

古地 喜太郎

聞き手・大石舞衣 杉原歩実 松井茜 (石川県立七尾高等学校2年)

自己紹介

名前は古地喜太郎。生年月日は大正13年10月29日、歳は88や。今はばあと若いもん2人、子ども1人と住んどる。孫は小さいんや、今は3歳にならんかな。趣味ってあんまないけど、TVとか見るね。小学校は二俣尋常高等小学校。昔はね、子供はようおった。小学校に100、200人とおった。おらのクラスには40人50人とおったげんよ。こんな奥の上やけど、すごいだろ。

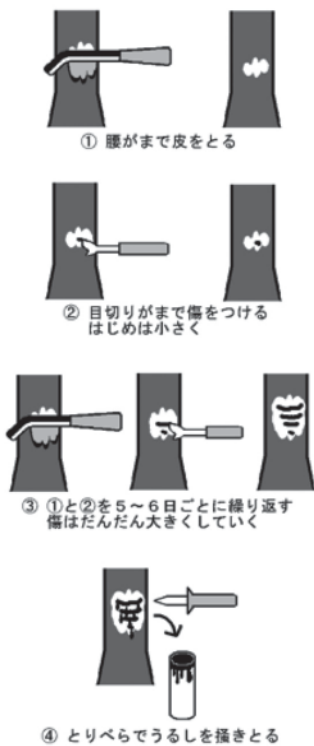
親の跡をついで…

おらが子供ん時は戦争やったんや。小さいときは、学校に行く前に家の手伝いで百姓して、草鞋(わらじ)作ったりした。学校出たら、出稼ぎや。東京の菓子屋で働いたり、土方やな。川の補修したりな。昔の人は、みんなそんな生活やったぞ。塩さえなかった戦争中は。みんな配給でな。兵隊行った者はほとんど帰ってこんかったわ。おらも行ったけど、ひどかったぞ。おらは親が漆掻きやっとなから漆掻きになったんやけど、戦争が終わってからは皆食料増産せんならんがになつたから、漆が生えとつた山を切つても、それを畑にしたんや。漆無いと仕事にならんからな。漆掻きが減つたんや。昔はこの部落にもたくさんの漆掻きがおってんけどな。今はこの部落におら1人だけでだれもおらん。

漆掻きの仕事

漆の木に傷をつけて漆を採るんや。腰がまを横にして皮をむいたら、目切りがま、最初は小さいがに傷つけて、だんだん大きくして行って、筒で出てきた漆を採るんや。筒1本で大体500ml採れる。筒をいっぱいにするがに、何回も木を回る。1日に大体40~50本、木を回るな。1回行っただけでは出ん。4~5回ぐらい行かんとな。漆は、1日おいたら乾いてしもうさけ採ってきたときに桶に入れて蓋して保存しとくんや。漆の木に1回傷つけても、小さい傷しかつけんから、漆が木に流れてしも。何回か削つて、傷が深くなつたら出る。傷つけたら5日目に木に登る。漆は出るんがはやいぞい。水みたいがんにしてさーっと出てくる。でもちょっこりしか出ん。ほんで朴の木の皮当てて、とりべらで採る。車で現地まで行って、5時間か6時間くらいかかる。大きい木を回るときはもつとかかる。木によって採れる量は全然違う。出る木と出ん木がある。出る木と出ん木は出る漆の量が3分の1ほどちごうげん。漆の量の一番の違いは木の大きさやな。細い木はすぐに掻けるけど、あんま出ん。大きい木は出るけど、はしご持つて行って上の方まで掻くさけ手間かかる。見た目で分かるかとよく聞かれるが、見た目では大体分かつたしと言えん。はっきりこうやとは言えん。目止めすりゃ大体分かる。出る木は皮が柔らかいわ。ガサガサの太い皮の木はでかくてもあんまりでんげちゃ。皮が薄すぎる木は出んしな。

大体、5日に1回掻くんや。木によって5段か6段ずつ傷



つける。1回に1つだけ傷つけて、次に回ったときに違うところに傷つけて。1本の木に10回以上回って、傷をどんどん深くしていくんや。いつでもいいわけじゃないぞ。晴れりや搔かれつけど、雨ふりや行かれん。ちょっと行って仕事しとっても、雨降りやだめや。それに、10月になると漆は葉が黄色くなってだめにるから、漆が出るんや。

支えは孫の顔

漆掻きの仕事はこっこの都合で休むわけにいかんから、病気になつとる暇がない。若いもんと住んどって、今もうすぐ3歳になる孫がおるし、食べ物でも好き嫌いなしになんでも食べるさけ、長生きしとるんかな。漆を掻かんときは山仕事ばつかりや。木切ったり、下草刈ったり。今は使わんけど、昔はここの木で大きな家を建てたさかいな。自分の山だけじゃなくて、業者が頼んできた木も切るんや。本当は木の植栽やら、新しい品種やらの試験がなければ儲からんし、漆掻きなんかやとらんよ。市の植栽から始まって、県の取り組みやらやったさけやらんなんと思うたから長く続いたんやな。ただやとつたら続かんわい。

昔に比べたら、漆の木は減ったままやけど、今まで放っておいた訳じゃないぞ。昭和40年頃から、輪島市が木植えてんわい。植林し始めて、おれらのとこにも植えてんぞ。そして世話したんやちゃ。木は10年ほどせな大きくならん。大きくなったら、今度は世話せんがんになって。市の管理がなくなったら、木が枯れてしもうた。残った漆の木は掻いたけど、ほとんど枯れた。そいから県が漆のよく出る品種を植えるつちゅうもんで、その仕事もやったわい。世話せんがん

なつたらだめや。

本当は、昔は、掻いた木を切つてしもうたら芽がすぐ上がつて案内、はよ大きくなってん。竹と一緒に根がずっといつとるさけ、芽が出るげん。昔は根っこから植えとつた。

去年は苗作りやとるけど、分根したり、手かけるとかえって上手いかんわね。種を蒔くときは、種を塩酸で焼いて、上の皮をとつて蒔かなだめねんわ。去年は薬品使わんと芽でなんだわ。湯につけて、灰を混合してやってみてもだめやったわ。

跡取り問題

息子にはちょっとし教えとるけど漆掻きやるかやらんか分からんわ。みんな漆掻きの仕事見に来とるけどなつかなか漆掻きやりたいちゅうもんもおらんわ。たまに、漆掻きの作業を教えてほしいちゅう人もおるんけど仕事にはせんわ。ちょっとしだけやって終わる仕事ねんたらしいけど、漆掻きはちょっとしだけやっても仕事にならんしな。こっこの都合で休んどれんし儲からんから根性無いと勤まらん仕事やからな。

漆掻きは技さえ覚えれば誰にでもできると思うけど、漆は7月から9月の1年の一番暑いときしか採れんわ。まあ厳しい仕事やわい。そいて漆はかぶれるんやちゃ。直についたらかぶれる。やから、ゴムの手袋して掻くんやけど、何回も使えばしびれてくらあ。2~3回しか使えんな。おらでも直につきゃあかぶれるわ。山の仕事は命が脅かされるような危険は少ないけど、ひどいんやちゃ。それに漆の仕事は儲からんげちゃ。昔は輪島で漆をよう使うたから、漆はどんだけでも売れたげんや。今、漆もすぐ安くなってんわな。100mlとれても1万ぐらいや。

漆掻きの技が途絶えるんはさびしいな。なんとかしたいんやけどな。生きとるかぎり伝え続けるわい。まだまだやることいっぱいあるわい。

これから

輪島塗が前みたいに繁盛して売れてくれればいいがんにな。輪島塗は、何遍も研いで塗つてはするげん。ほやさかい、漆ははげんよ。長持ちするわい。

昔は、輪島塗には輪島の漆を使うとつた。安いのは中国産の漆を使うとる。昭和の終わりころからやな。中国産の漆は乾かんも速うて、扱うんが楽で、いろいろ混ぜてあつて素人でも塗りやすいげんと。輪島のはいい漆やけど、塗りにくくて、塗るがに技が必要やと。

国産の漆は、手際悪いと縮むし、乾きが遅いやらで難しいげんと。いい漆でも、塗れる人が少なくなつとる。昔の輪



漆掻きの道具



長持ちする輪島塗

島塗は何年使うてもはげなんだ。輪島の漆ばかり使うとつたさけな。中国産のはすぐ乾いて簡単やけど、はげるのもはやいぞ。中国産の漆が出てきたから国産の漆が売れんなつてんわな。また、輪島の漆が見直されればいいなと思つとる。いいもんはいいぞ。末代までの宝や。

PROFILE

古地喜太郎 こうち きたろう

大正13年10月29日生・88歳・漆掻き

経験年数は66年。戦後に復員してから、郷里の中島飛行機株式会社勤務しながら、農林業に従事してきた。漆掻き職人であった父より技術を学び、最盛期には年間400本の漆を掻いていた。これまで、輪島市や石川県の漆掻き試験に積極的に協力してきた。現在は地元の育林事業を行う山主の管理人をしており、また、希望者の指導を行い、漆掻きの後進の育成に励んでいる。

● 取材を終えての感想 ●

今回は冬に取材しに伺ったので実際に仕事現場へ行き、作業を見ることができなかったのは残念でしたが、古地さんのお宅の居間でくつろぎながら和やかに取材ができたのでとてもよかったです。最初、漆掻きという職業は耳にしたことはなかったので全く想像が付きませんでした。取材を通して漆掻きの仕事内容や大変さについて知ることができた上に、伝統工芸品である輪島塗の現状なども知ることができました。特に中国産の漆の話がとても印象的でした。漆の世界も大変なんだなと感じました。能登のすばらしい里山里海が世界農業遺産になった今、もっと輪島の漆や輪島塗を世界中の人に伝えられたらいいなと思いました。(大石舞衣 写真:中央)



今回の取材を通して、輪島の自然とともに生きてきた古地さんの暖かさに触れました。「孫がおる」とうれしそうに話して下さった古地さんは、優しい普通のおじいちゃんでした。取材中に「みかん食べまっし」と勧められて、まるでおじいちゃんの家に来たように感じられました。でも、取材の内容には漆がとれない、あとを継いでくれる人がいないなどで苦労なさっている感じが感じられました。真夏の暑い時期でないと採れないし、雨の日には掻くこともできない中での漆掻きの仕事はとても根気がある仕事であり、それを1人でこなす古地さんはすごいと感じました。孫の笑顔でこれからもがんばってほしいと思います。(杉原歩実 写真:右)

わたしは一応輪島市民で、輪島塗については小学校のころから習ってききましたが、輪島塗の原料になるうるしを採取する、うるし掻きについては何も知りませんでした。

うるしを採る名人を取材すると聞いて、「斧みたいなものでカンカンって傷つけて、出てきたやつ採るだけやろうな～」というくらいに軽く考えていました。しかし、実際には意外に繊細な作業で、採るのに時間がかかり、一度に少しの量しか採れないことや、身近にうるし掻きをしている人や後継者がいないことがわかりました。また、名人にはいろいろなお話をしていただき、名人が子供のころの今よりずっとにぎやかだった田舎のようすや、戦争のお話も興味深かったです。

名人と交流する機会はめったにないことなのでよい機会だったと思います。名人にはこれからも元気で長生きしてほしいです。(松井茜 写真:左)